

諸出江中兵衛尉
江戸ノ御所
江ノ内ノ御所
被下之御所

慶長十六年
正月二日江戸於御城御謠初御座配

左 松平安房守 松平甲斐守
松平外記 本多伊勢守

右 最上駿河守 小笠原兵部少輔
浅野彈正 西郷出羽守
牧野駿河守

於駿府出仕如例自江戸以酒井左衛門尉を御
礼有
正月廿日江戸御城御具足之御祝御連歌
若みとり雲井に立や庭の松 紹之
春の朝戸を明むかふ三年 秀忠公
去三日蒲生飛騨守家火事門ハ残池田
三左衛門家類火 飛騨守ハ二日福留主也旧冬御城之時依作
信江戸之御家老 家也新敷候へ共能相也門ハ御成門アけつつかうす
並奉行候
正月廿一日 安齋野馬守重
但馬守於野 御付廿二日
大坂御出立
州一万石拜願

七日 大御所様田中へ御鷹野ニ御出九日ニ
榛原郡御鷹野中泉へ御出
十日ニ御油之町火事
昌琢會之連歌
けふぞ聞百よころひの鳥のこゑ 昌琢
若木の梅の咲そむる庭 玄仲
雪深き山櫻戸ハ春しらて

二月九日稲留一夢於駿府ニ死去是當代無双
之鉄炮之名人也武勇之儀悪敷候て細川
内記父子深くかまひ候へとも鉄炮名人故
大御所隠して御れんみん被成
三月六日江戸御城御普請初る
同日 大御所様御上洛駿府を御出 小届中へ御法度
五ヶ条出ル
同十七日御入洛

丹波國之代官権田小三郎能勢と山致公事
負に成改易被 仰付御代官所勘定被 仰付
負あり金七百枚致弁上

三月十九日徳永左馬助京之宿焼亡
同廿日右兵衛督殿常陸介殿宰相ニ御補任
水戸殿中将ニ御補任

同廿二日 大御所様御所望ニ當家之御先祖新田
義重贈官あり 鎮守府將軍
廣忠公ニ贈官 權大納言
廿二日本多豊後守廣重死去十一日より 風
毒腫を相煩終ニ如此

同廿七日親王へ御讓位
廿八日大坂秀頼公御上洛織田有楽片桐市正
同主膳大野修理其外御番頭衆小姓衆三十人
計御供
右兵衛督殿常陸介殿上鳥羽迄御迎ニ御出被成
右兵衛督殿御供ニ浅野紀伊守常陸介殿御供
加藤肥後守也羽柴三左衛門藤堂和泉守計御迎ニ
出 秀頼公竹田通京都へ御出片桐市正所迄
御着座被成候市正所ニ肩衣袴被為召二条之
御所江御入被成候御進物ハ真盛之御太刀黄
金三百枚狸々皮卅枚段子卅卷御膳部美麗
之御饗応可被成候へ共御隔心可有由ニ只御吸
物三度計也

御一献目ニ大御所様御盃秀頼へ参其時大左
文字之御腰物鍋通之御脇指被進其外御
鷹三居 鳥屋之 御馬十疋御進上御盃秀頼公ノ
大御所様へ参候時秀頼公より一文字之御
腰物左文字之御脇指御進上高臺院殿も
御出御對面御相伴五人之奏者榊原伊豆守
永井右近 西尾丹後 城 和泉
銀子百枚 本多 上野介 石見守 伊賀守 銀子卅枚
安藤 帶刀 村越 隼人 清右衛門 銀子廿枚

女中 おあちや殿 おかめ殿 おかち殿 惣女中へ三百枚
右兵衛督殿へ御太刀 金百枚
常陸介殿へ 御太刀 一文字 金百枚
秀頼公則御帛本通を御座大佛御見物大工
大和守ニ銀三百枚被下豊國へ御辻参銀子三
百枚御寄進其日ニ大坂へ御下向

大御所様御供無御座候事
秀頼様昨廿八日 大御所様正御礼被仰上候其様子之御事
小姓衆卅人計ニ御座候事
右兵衛督殿常陸介殿上鳥羽迄御迎ニ御出被成候右兵衛督殿御供浅野
紀伊守常陸介殿御供ニ加藤肥後守被成候其外羽柴三左衛門藤堂和泉守
事御迎ニ被罷出候事
秀頼様竹田通京都へ御座候片桐市正所迄御宿座被成候市正所ニて御肩衣
袴被為召夫が二条之御所へ被成御座候事
二条之御所ニ大御所様御禮被 仰上候事
秀頼様御進物ニ真盛之御太刀黄金三枚狸々皮卅枚段子卅卷御進上
御座候事御膳部美麗之御饗応可被成候へ共御隔心可有由ニ只御吸物計也
三献之御祝御座候御一献目ニ大御所様御盃秀頼様江参其時 大御所様ノ
大左文字之御腰物鍋通御脇指被進候其外御鷹三居 御馬十疋被進
候事 大御所様ニ参候時秀頼様ノ一文字御腰物左文字之御脇指御進上被成
候事
高臺院様も二条御所へ被成御座秀頼様御對面被成候事
異ニ右兵衛督殿へ御太刀 光忠 金百枚常陸介殿へ御太刀 一文字 金百枚女中お阿ちや
殿 おかめ殿へ各金三拾枚本多上野介大久保石見守板倉伊賀守各金
三十枚榊原伊豆守永井左近西尾隠岐守城 和泉守大澤侍從各銀子百枚安藤帶刀
村越茂助成瀬隼人米津清右衛門黄金二十枚
秀頼様御供相濟御進物御出被成候本通を被成御座候 大仏御見物被成其ノ豊國御社参
被成
大坂へ御下向 御座候愛許上下万民目出度奉存候此趣可被仰上候
今日大坂御下向ニ御座候
酒井雅楽頭殿 本多上野介
大久保相模守殿 本多正純
土井大炊頭殿
青山圖書助殿
本多佐渡守殿

卯月二日右兵衛督殿常陸介殿為御礼御下御進物
銀子 千枚 御太刀 御馬一疋
淀殿へ 銀子二百枚綿三百把
姫君へ 銀子百枚綿三百疋 紅三百斤
御太刀 銀二百枚 右兵衛督
銀百枚 綿二百把 紅三百斤淀殿へ兩人より
同前ニ被進
銀百枚 綿二百把 紅三百斤 姫君へ兩人より
同前ニ被進
右兵衛督殿へ秀頼公より被下物
御腰物 吉光 御刀 貞宗 段子百卷御小袖 御羽織
アリタノ小太鼓ノトウ 是ハ此御兩人 御打被成候付如此
御太刀 二文字 御腰物 信國 段子百卷
ここねノ小鼓トウ皮ともニ能之装束
御供之衆年寄り方へ刀一宛
猿楽十八人へ小袖 同 同朋へ小袖被下
其日 伏見へ帰京

秀頼上洛之時之御作法追 本多上野介ノ江戸江申上其状如左熊申上候
御讓任一昨廿七日ニ御執行被成候 禁裏様御機謙能被成御座候由ニ御座候

秀頼上洛之時之御作法追 本多上野介ノ江戸江申上其状如左熊申上候
御讓任一昨廿七日ニ御執行被成候 禁裏様御機謙能被成御座候由ニ御座候

秀頼上洛之時之御作法追 本多上野介ノ江戸江申上其状如左熊申上候
御讓任一昨廿七日ニ御執行被成候 禁裏様御機謙能被成御座候由ニ御座候

一 卯月五日家康公從伏見帰京

一 同六日浅野彈正(朱書) 少部長政イ死去下野國塩原へ合湯治

一 之処二二三日不例不慮如此六十五才

一 同十一日京二条之御所二常陸介殿能有

一 同十二日天子御即位十九才

一 家康公裏頭二忍ひて御見物見物不有之由

一 十七日家康公智恩院へ御参詣

一 十八日京を御出永原二御泊 十九日彦根二御泊

一 十日雨降柏原迄御出廿一日岐阜其夜鴨飼

一 御見物候へ共不出来にして鮎一ツも不取廿二日

一 可能へ御成名古屋迄御出廿三日名古屋御立

一 熱田より船にめし御下其日東風吹野間へ

一 御船をよせ候へ共よらず迷惑無申計廿四日

一 にも風吹御船をちた郡へよす廿五日三川國

一 むろへ御上り俄事二此所に人馬不自由 下

一 々女衆吉田迄歩行 行々々御供衆船に酔

一 候得とも大御所并右兵衛督殿常陸介殿へ御醉

一 不被成候同廿八日二駿府へ還御

一 江戸御普請最中御急之間日用取敷多あり

一 土民百姓錢を取満足申候

一 六月朔日尾州名古屋之御普請 付美濃衆

一 伊勢衆下着千石夫を出す

一 禁中御普請二付付築地一間八尺之間銀子

一 二貫五百目を以てつとめ関東衆へ銀子を指上

一 伊賀守と御大工大和方へ請取京之町人二渡之

一 可務由定め被仰

一 去年より黒船参候二付京田舎迄糸沢山有之

一 六月十七日堀尾帯刀死去一昨朝よりくわくらん

一 仕俄以如此

一 同廿四日加藤主計頭(朱書) 清正イ於國死去去年五十

一 北國前田肥前守春より相煩今程散々

一 福島左衛門大夫春より相煩存命不定之間存

一 生之中継目之御朱印所望にて息男駿府へ

一 下向其後江戸へも下向

一 七月三日江戸井伊兵部屋敷火事出来榊原

一 遠江守家類火

一 同八日美濃國高巢之住徳永石見入道死去

一 五三年前腰拔不行歩(この部分抜く)遺物金子

一 九百枚有之

一 同十日江戸御普請出来

一 八月廿四日加藤主計頭(朱書) 同虎之助忠康後守イ息父之跡を拝領小沢

一 瀬兵衛半礼郷右衛門両人為御目付肥後へ下向

一 浅野紀伊守父彈正葬礼於高野山美麗之吊

一 有之

一 下野常陸兩國二盗人大勢蜂起して所々夜打

一 仕又者昼間も鉄炮にて旅人を打落荷物を

一 取申候事数不知江戸より足輕頭衆細井金兵衛

一 久永源兵衛服部中三人二被仰付候間同心共召

一 連参候て能々致穿鑿盗人九十三人召連候補て

一 成敗仕小山之芋柄新田と申所二九十三ヶ所二首を

一 かけ高札をたて罷帰候

一 九月大

一 五日江戸公方様御息女(於地奥) 十一才出御越前少将殿へ御

一 縁邊當月廿八日於越國御祝言可有由

一 十一日姫君駿府へ御着(土井大炊頭渡辺山城守奉供) 長谷川筑後守御守イ附

一 十五日二於駿府姫君御馳走之御能有

一 十六日姫君駿河御立可有候処二以之外御咳氣被

一 成候二付十八日迄御延引御本復被成御立被成候

一 十月六日 大御所様駿府より御下向七日今泉云(本)

一 善徳寺八日三嶋御着九日小田原 御着大久保相州

一 被召出加賀守所勞御尋十日中原御鷹野

一 十月十日大久保加賀守於小田原死去(朱書) 三十二歳○春中より

一 相煩如此此仁無双之御出頭人権勢高候得とも

一 天性けつかうに和にて其恩慧をしたひ

一 愁歎迷惑いたす人前後を不知驚候て其

一 支配方頭方へも断をも不申小田原へ馳行人

一 数千人五三日之間ハ夜昼之さかいかいもなく道も

一 さりあへぬ程也後日二何も自由之儀不屈之由

一 御とかめ有之

一 十三日藤沢御着十四日神奈川御着 將軍家御

一 迎御出御對面同日御着

一 廿六日 大御所様戸田へ御鷹野二御出右兵衛督殿

一 常陸介殿御同道目代中村と申者餅を進上候

一 得は御機嫌能候て中村御時服拜領

一 十月十六日藤堂和泉肥後仕置二被仰付下向

一 十一月九日右兵衛督殿痘瘡御煩

一 十七日伏見之新町火事大名之家廿間程

一 燒(龜井武州古田大膳嶋津右馬橋栗右近田中筑後池田備中石川長門藤右近毛利伊勢加藤左衛門日根野左京堀久太筒井紀伊守其外有之)

一 廿三日 大御所様駿府へ御帰右兵衛督殿御痘瘡

一 御本復御祝ひ有

一 十二月七日新庄駿河守下総國御鷹場之近所

一 鷹をつかひ申候間鳥見之衆是を見申

一 候て申上間則父子御改易二被 仰付

一 十二月九日江戸二土井大炊頭成瀬準人増上

一 寺被仰付上州新田へ下向是ハ御先祖御

一 出被成候所二候間為御菩提大光院と申寺

一 御建立被成今度義重へ贈官被仰付候へ共

一 御廟もしかとしれふ申所之者も久敷

一 事二候へハ不存候御名字之地故此所御廟を定

一 申候先年 大御所様御先祖徳川殿の御系

一 圖御穿鑿被成福山月安足利之寒松鉄子

一 等に被仰付色々御尋御吟味候へとも新田義

一 貞之子孫并世良田殿徳川殿ハ尊氏將軍

一 之時此國を御出越後へ御移其後奥州へ牟人

一 其後信濃へ御越爰にて皆御生害ありて終二

一 此國へは帰り給はず由證據之文書分明之

一 由月齋寒松書付を以申上然共上州にも

一 近代迄新田之城主あり是を新田治部大輔と

一 申是をまされて所々百姓以下新田殿と申号

一 屋形ト是ハ尊氏ノ義貞を追討之後二義貞末之

一 一族二新田ノ田中新田岩松新田ノ大嶋と申新田ノ

一 類三人あり此人々義貞二恨ありて山門より

一 南皇御出之時分御供申尊氏へ降参いたし候間

一 尊氏より上州之本領を安堵す其内新田

一 岩松治部大輔鎌倉基氏へ忠有て新田之城を

給る家老を金井新左衛門と云代々主を新田治部大輔と申家老を金井新左衛門と申事太平記之時分より近代迄如此然に此家まきれて義貞ノ子孫之由を存知色々申といへ共文書系圖「まきれなし此家も末に成 近代天文之頃武州より横瀬雅樂助と申者牢人して来り彼家「仕へ忠切をつくし後には家老共を指置て軍代をつとめ二代相續して大名「成後には家中之侍を手「付候て終に主之新田治部大輔を追出し新田城を「取由良国繁と改名して代々子孫新田之城主にて天正十一年迄新田「在城す初之岩松治部大輔尚純入道類喜ハ歌人「而永正之頃書置たる歌書之ことは書「家之なりたてを荒増書たる書有月齋今度大御所様「懸御目候也又由良之國繁も本名横瀬と申武州之小野氏也小野國繁と自筆「書候短冊二枚寒松求「今度進上す右之岩松久敷新田「罷在候「付所之者も新田殿と申其身もあやまり候て義貞之子孫かと存先年以月齋を御尋之時駿府へ參申たて候へ共的傳之系圖も無之應永之頃より中奥之祖天用入道已来治部少輔宗純其次明純六七代計書つつけ一卷指上げる月齋を古河之御所へ被遣古文書共取合御せんさく候へハ弥義貞之末「而ハ無御座候て岩松治部大輔筋「而御座候間御扶助不被成候てむなし上州世良田へ罷帰候然共重代之古き家「御座候間居住之屋敷分指置「被 仰付候次の新田の主由良も今ハ新田と申候

一 同月柴田七九郎御預之与力同心共と公事仕七九郎非道有之「付 御改易被 仰付下野足利「籠居仕候公事仕候與力五人被 召出甲州之定番衆「被加是ハ元来甲州案内

存知候故也残ル与力歩行同心ハ土岐山城守「御預被成 松平小作 加藤 同久米 等也是土岐山代に御預被成七九衆と申柴田と公事仕候五人ハ水原内匠 花村忠兵衛内川七左衛門山田六右衛門内田小大夫是等甲州の定番「參候是も七九衆と申候 廿四日土井大炊頭自江戸御使到駿府御帰座之御祝 如右大將家以後代々公方之法式可奉仰之彼考損益「而從江戸被出御目録は弥堅く可守其旨事 或背御法度或違 上意之輩各國々可停止相拘事 右若於違背之輩は被遂御礼明可被處嚴科者也 慶長拾六年四月日 国持大名衆連判一通 国不持衆連判一通 在江戸東國衆一通 式万石より高之衆誓紙有之 十二月二日秀頼ハ宰相殿御疮瘡御本復之御祝儀駿府「御使者有遊佐新左衛門下向是元来河内重代之侍也と云々

右慶長年録自六年至十六年 以 酒井雅楽頭藏本校合有異 同者朱書以補闕云 文化元年四月 日

慶長十七年 正月二日江戸御城御謠初夜「入雪二三寸 左 最上駿河守 小笠原信濃守 松平外記 牧野駿河守 右 松平安房守 松平丹波守 西郷出羽守 此頃二番目之若君御疮瘡被成但輕し 四日平岩主計名古屋之二の丸「而死去 大御所之御意に病中犬山へ移り候て可相果事「不謂死所かなと御無奥 正月七日 大御所様遠州三河尾張之内御鷹野「御出二月六日駿府へ還御 從去年諸國野物成江戸へ相納美濃伊勢兩國ハ駿府へ納駿河遠江尾州兩御息分國 江州十三万石駿府へ納 三月十一日公方秀吉公 大御所様へ為御見廻御上十七日駿府へ御着 此頃吉利支丹御法度きひしく被 仰付小笠原権之丞神原加兵衛原主水御改易右之宗門たるによつて也 御意候へ共承引不致候て如此 三月廿三日岡本大八と申者是も右之宗門又ハ長崎奉行有馬修理を日頃取持たらし内々「而申ハ金子を多く指越候はば老衆へ遣し又出頭之女中へ遣し九州之内鍋嶋知行預分二郡を申請まいらすへきと偽り候を真にいたし金銀出数多是を取候て一圓沙汰もなく不致返答候間公事「成大八負候て則廿一日「阿部川原「而火あふりに被仰付諸人見物にくまぬはハなし大八死時申様は有馬修理にも大悪あり唐船之糸奉行に被遣候長谷川左兵衛を有馬修理ゆみ打「可仕由我等「相談申所分明也と申候て死申候間有馬修理も囚人にて大久保石見「被仰付甲州へ被遣御穿鑿可有と也 知行子左衛門「被下

一 廿五日駿府御城^二御能有小進法印今春

常陸介殿も被成候又下手の遠山民部鈴木

久右衛門池田備後一番宛被^レ仰付^二大御所様大

笑被成候鈴木ハあふひの上つき水無瀬一窟遠山とてハ小町
池田ハ千壽いづれも見物御免にて不允申候

一 廿六日投頭巾と申茶入秀忠公へ被進

一 廿七日 大御所様へ御茶之湯之會あり秀忠公

御入(朱書)様イ

一 四月四日加藤主計頭子息 大御所へ出仕金百枚

卷物三十 むくの拾十 公方様へは江戸^二

出仕可有由被^レ仰付

一 九日 大御所様 將軍様御兩人御對面數刻余

人御近所へ不參

一 十日秀忠公駿府御立

一 十四日今河氏真自京下向駿府御前へ參着ノ

御物語有

一 廿日吉田城主松平玄蕃死去亥刻氣分悪敷

由申出し子刻死去父備後守も又頓死

一 四月土岐山城守大番頭被^レ仰付

一 五月四日江戸龍の口上総介殿屋形夜半計に

焼亡す

一 有馬修理亮去年十二月より御預^二成甲州

都留郡^二罷在可及生害^二由御立腹あり申わけ

不叶五月七日終^二切腹也是長谷川を可殺用意
驅散也

一 五月十三日會津之蒲生飛騨守死卅才大酒

を好み近年諸事作法悪敷無行儀也小姓

本山主膳岡佐右衛門兩人迄腹切五月十五日^二大御所様牧野清兵衛
為御使者御業被下末^二到来

一 六月朔日土井大煩家焼亡不及他所

一 六月六日加藤肥後守^{十二才}堀尾山城守^{十四才}在江

戸仕候処^二今日御振廻被下御暇被仰出八日江戸を

可罷出由被仰渡六月廿七日^二肥後守家老共へ
被仰付來の有未注也

一 笠間^二三年無城代候間松平丹波守移り可

申由被仰付小笠原左衛門佐古河へ移今迄本庄

^二一萬石被下候処^二一萬石之御加増^二古河へ

參候丹波守も一萬石御加増^二笠間へ參候

一 大鳥井逸兵衛と申かふき者ありてめしとらゑ

是ハ二三年以來江戸中之若き衆^并ひち

を張る下々迄皆一味同心して逸兵衛組と号

一同の思ひをなし互^二血判之起請文を書

其趣ハ此組中何様之事有之とも互に身

命をすて見つき可申候たとひ親類父主

にも思ひかへ兄弟より頼母敷可有之と申合候

大将之分ハ大風嵐之助天狗摩右衛門風吹ハ散

右衛門下之組頭ハ大橋摺右衛門と申者江戸中^二

充滿して所々^二辻切不絶破喧嘩及敷度之

間御法度^二被^レ仰付下々^二左様之者有之は

召捕断罪可被^レ仰付由被仰出爰^二柴山孫作

と申者之家来右之組之小頭也孫作聞て

大^二驚き臨より訴人無之中^二令成敗可

然と廿五日權左衛門家来之者二三人^二申付置彼者

を呼出し手打^二可仕と用意候得は残家来共

皆彼者之組^二成主にもかへましきと申合

誓紙を書けれハ家来寄合候て主之權左衛門

を打切欠落仕候間是より猶以御法度つよ

くなり方々之路次^二関をすへ在々所々迄

御穿鑿有六月之末^二神田之町^二夜五ッ過

に月夜^二笠をきて通る者あり不思儀と

申て町よりとらへて引^二来る見れハ彼主

を殺したる者也則宿を尋て道具を取寄

せんさく候へハ一味之悪黨之名を書たる候

あり其類五百人余也大将之大鳥井逸兵衛

を御尋候得ハ宿ハ八王子^二有則召捕^二遣し

候也高幡と云所之不働堂^二相撲見物^二行候

間則大久保石見内八王子之町奉行内藤

平左衛門と云者高幡へ行謀りて召捕ける

平左衛門も大力^二逸兵衛も相撲之達者たがい

にとり合上下へ返す^二大勢より繩をかけ

候て江戸引^二參る青山權之助所^二被召置

色々御せんさく水火之責に及ふといへ共

同類を一人も白状不申

一 此逸兵衛ハ元来本多百助か小者^二勘ヶ由

と申ていたつらなる件也去^レ慶長之初秀

忠公御上洛之御時百介御供^二參候時伏見

小者共枚番御殿之近所之辻^二草履之

つめひらき馬之請取渡しを稽古いたす

あまりにとろめき後^二御法度^二成候て其

大将を被召捕百介小者も大将にて致欠落

佐渡へにけ行大久保石見家中にて辻喧嘩

なと一兩度首尾能候て大久保石見守目代

大久保信濃と申者侍^二取立召仕候然^二天性此

者りこんにて弓を上手^二射ならい鉄炮も達者

兵法鎗惣^二侍之たしなみを不残けいこいたす

間中小姓^二取上馬なともり得たり其後本

田百介方^二かまひ申候間大久保信濃則故主へ

もとし候へハ百介方へ帰りける時々四五人

かかへ弓たてもたせ丈を引せのりかけにて

来る百介も此跡を見て召つかひても無專

とて衣服なとらせ四五日過又信濃方へ送り

ける其後又打者など首尾能いたし扱信濃

に暇を請江戸へ来りかふき者之組をたて

棟梁となり終にハ如此本多佐渡守土屋

權右衛門米津勘兵衛方^二色々推問いたし

候へ共一度申間敷由申候て何ほとつよく

御責候とも同類申間敷とて一圓不申水

問又はすねをひしぎ候ても不申候間米津

勘兵衛餘りに申かね候はば尿水をくれ候て

問候へと申付候へハ逸兵衛大にいかり侍たる

ものに左様のかうもんハ前代未聞成如何^二

罪科のおもき者成とも官人の部ハ平土

の上に不置と聞也是により官人ハ官人の

はねの号有侍ハ又侍之法にてがうもん

の作法あり扱々物を不知奉行かな左様

之間様あらハ其方之子息勘十郎我等

同類也勘十郎^二も尿水をくれてとへと

申ヶ其後閉口す聞人扱々此逸兵衛ハたく

ものにあらずと皆舌を巻七月七日以水野

監物を駿河へ此よし被 仰上

一 其後逸兵衛ハ江戸中引渡しはた物ニから

同類皆成敗三百人計被切此内無躰ニ死申候
もあり是ハ當五月此同類ニ辻喧嘩いたし

相果申候者あり是此組之中之牢人也然間

同類にあらずといへ共知人も寄合て代物

をいたし候て寺へ送り吊ひ佛事いたし候

其帳ヲ寺より出シ候間帳ニ付代物いたし候

者ハ罪なくしてきられ申候後日ニ知れ

奉行衆之あやまりかとい申候

一 七月廿四日近江之長濱ニ罷在候内藤豊前

死七十才

一 同廿八日大久保石見守俄ニ大中風を相煩

一 九月十三日池田三左衛門一昨日駿河へ着今日出

仕同日黒谷火事有之然上人像令焼失

一 十五日於駿府池田三左衛門御振廻

一 同十六日池田江戸へ下會津蒲生飛騨守子息

下野守ニ駿河へ為出仕上り五日逗留申之テ

下向ス同十六日福嶋左衛門大夫出仕其後為出仕

江戸へ下向ス

一 江戸ニ今度逸兵衛同類ニ成衆方々御預之衆ハ

米津勘十郎津輕兵衛子

井上左平次半九郎兄 佐渡へ

坂部金大夫越後桑田へ 津口伯耆守預

一 越前国三河守殿御家中珍事之公事起り彼

國大ニ動關す是ハ久世但馬守と申者と岡部

自休と申者へ知行之百姓公事より事

起り申候

右之御家中ハ先主中納言様天下無双之人數

寄ニ而關東西國 武刃名有者撰ひ御抱被成

越前にも諸國ニ勝れ能武士數多御座候間

殊之外家中衆權高にして威勢を争ひ

申候中納言様御他界之後今之少將殿御

若年に候得ハ家中何様之申分仕大坂衆と

心なと合候はば大事也と思召去ル慶長十二年

より越前と大坂之間近江之長濱ニ俄ニ取

手を御取立内藤三左衛門城主に被 仰付然ハ

國中ニか様之申分出來申候 大御所様御工夫

不淺と奉感候

一 閏十月二日 大御所様駿府より江戸へ御下向

去月廿四日ニ御出可有処ニ御腫物氣故御延引

今日大雨故江尻迄御下道中御鷹野被成

十二日ニ御下向

一 越前之公事之起りハ其頃佐渡國ニ金山繁

昌して京江戸にも無御座程之遊山見物

遊女等充滿す國々々來る金ほり町人

等か様之遊興にふけりもとてを失ひ候て悉

くつかれ國本へ帰事なき者數ヲ不知身持

よくして帰る八十人ニ一人也然間佐渡へ

參候者三年之約束仕三年過候得ハ最早

皆死申候と存候也然ハ越前久世但馬守百姓

佐渡へあきなひに渡り妻ハ岡部自休と申

仁之百姓之むすめ也妻を三年か間舅ニ預て

渡る三年過申候はば何方へもかたつけ候へと堅

約束仕渡申候間三年待候得共不帰最早聲も

何方へも流牢仕候か又ハ死申候かと存三年四月

日ニ右之女ニ別に聲を取申候処ニ次之日ニ彼聲

罷歸申候ハ道にて相煩逗留之由申候得共 日

限約束ニ候得ハ公事にも不罷成候然共舅に

恨有之と申ねらひ候由然に舅を何者やらん

圍打ニ仕候野へに罷在候農人見申候得は切申

候者久世但馬か足輕之家の中へかけ入申候由

遠目ニ見申候と申候問うたかひもなき聲の所

意と諸人申候右之聲之所行と百姓共申候

然共見申候者付入候て断も不申候故然と證

據も無之とて死そんのやうに罷成過申候

然間岡部百姓共地頭へなけき申候事切也

是により岡部年寄共に申候へハ三河守殿御

幼少ニ候へハ爰元ニ濟かね申候江戸へ申もあ

まり成と延引罷成候是ハ三河守殿御幼少

故に家中我々ニ成一圓諸事落付不申候テ
如此

一 一方ハ久世但馬本田伊豆竹嶋周防など也一方

ハ林伊賀清水丹波今村掃部など中惡敷成

候て組々ニツニ成行候時分此公事起り申候間

一圓埒明不申候岡部自休ハ江戸へ來此事可

申候と存候て久世但馬直ニせんさく給候得と

断候へ共返事も不仕候岡部大ニ腹立今迄

ハ日頃入魂申候程ニ随分無事にと存候処左様

慮外之段無念之至也江戸へ申上候て何も

迷惑させ可申事有とて江州佐和山迄參候

処ニ越前ニ如何と沙汰有之日頃中惡敷衆ノ

申ハ先君中納言殿之御時御加増可被下由己

御書出し御朱印迄被下終に御加増無之内

御他界被成候ニ付御朱印持申候家老衆其外

申合御知行ハ不被下候とも金成共拜領可申

由申合御他界以後私ニ御金ヲわけ取申候事

あり其後此事久敷人不知之候今度皆々

不和ニ成此事少かれ岡部自休能存候間江

戸へ申上候はば人數多損可申と諸人申候三

河守殿開召それほと的事江戸へ申ニ及間敷

候間早々呼返し對決可被 仰付候由ニ岡部和

山ノ岡部を呼返し扱久世但馬方へハ右之

百姓殺し候者出し候へと被 仰付候はん為に

罷出對決可申候由被 仰付候久世ハ左様之別

之御沙汰有を不存候て右之百姓殺し申候

者を内々ニ切候てやきすて只一圓不存と

計申不罷出候偏運のきわめと申候岡部ハ

忍ひて江戸へ下り申候牧野主殿助も岡部と

同道しけるか如何思ひけん江戸へは不下向し

て高野山へ上出家しける林志水今村其外

之衆久世本田と中惡敷して色々申上候へ

とも久世罷出申わけ不仕候間久世但馬ハ押

かけ責殺し可申由相極り打手之大將に

本田伊豆を被仰付是ハ右之中惡敷衆之伊豆

をも一度に殺し可申ため也本田伊豆も日頃久世但馬一味なれハ風をくりて不参候間人質を被遣候間人質を伊豆府中之城^{置北}の

庄へ参候へハ則伊豆を御使として久世方へ右之科之条々被仰越候是ハ伊豆と中悪敷

衆定^{但馬方}御使を打取可申候かと推量仕伊豆を御使にと申上候て如此如久世但馬

家中之者伊豆を切申と取巻候得は但馬ハ敵の心をすいして伊豆ハ我等一味成必不可打

果とて返し申候伊豆掃り候て四方より取巻責申候鉄炮せり合伊豆内廿七八人討死多賀

谷左近家中七八人計討死高天神衆高須武大夫と申者堀一番にのり候へハ内より鎗に

て突て落す其子半一同つづいてのり申候内々つく処を半一もつき合其時大勢堀へのり内

へ押込玄關之前^急戦ひ申候伊豆組之先手は大石四郎左衛門と申小田原衆仕候由十月十九日

前日より取巻候得共家中女其外前十八日晚^二皆落残侍方久世共二百五十二人討死家^二火を

かけやけ立申煙の中に自害申候同日弓木左衛門^{法名}方へ青木方齋永井善左衛門御使^二被仰渡候齋安御使^二向て申ハ定て我等も

今日被仰付候哉向人ハ其御使と見得申候五日^前江戸へ一ツ書を指上申候間定^相果候て

後正路之御吟味有之今度之我等共之相手を一々死後^二失ひ罪科にふせ候てかはね

の上をひからかし見せんと申内へ入候間鉄炮を打かけ候へハ家来切て出両方戦向人之

同心卅人ほど討死齋安切腹ス同日上田隼人も切腹す

一 十月十八日 大御所様西ノ丸より本丸へ出御越前之公事達 上聞本多伊豆竹嶋周防今村

掃部志水丹後林伊賀被召寄江戸へ下る

一 十月十六日川越^{深津左衛門}鎌倉藤沢^{伊豆右衛門}越谷^{伊豆右衛門}大沢忠二郎 小金^{尾崎助大夫}浦和^{小笠原市左衛門}

鴻巣^{中川与助} 羽崎西^{大内四郎兵衛}此分御鷹場路次造り橋かけ木うへ砂置可申候由被仰越

同廿日將軍家戸田へ御鷹野廿四日河越へ御鷹野廿五日還御

大御所様東方へ御鷹野十一月十二日吉田之城松平主殿頭^二被下玄蕃

跡つふれ弟庄次郎西郡^二五千石被下兄玄蕃子なくして頓死仕父備後隠居仕候^二付次男内記^二

隠居跡三千石可被下由申上候^二備後も相果内記も相果内記^二幼少之子あり是次男之筋^二御座候間跡日被仰付可被下由家来少々

望申候へ共内記弟庄次郎江戸^二御奉公申罷在候間是^二五千石被下内記伴ハ庄次郎

令扶助可申由被 仰付是ハ松平紀伊守外孫にて蔵之助と申候玄蕃にかり罷在候

十一月廿六日晴 大御所様從御鷹場御掃廿七日晴於御城越前衆對決 御父子様直^二被聞

召 同廿八日晴 將軍様被仰渡今村掃部志水丹後^{十七日改易}林伊賀負^二成本田伊豆守勝に成越前之儀

万事御異見可申上由被仰付翌年十八年五月十八日に中川出雲廣次兵庫林伊賀配流

志丹後ハ仙臺へ配流政宗^二御預掃部ハ岩城へ配流鳥居左京^二御預林伊賀ハ真田伊豆^二御預竹嶋

周防ハ對決以後自害仕候^相果越前へ本田丹下を被遣丸岡之城被 仰付二万

石御加増被下本多飛騨守と申候^{千時二郎大夫}十二月二日晴 大御所様江戸御出同十五日駿府へ還御

同三日信濃衆保科肥後守仙石兵部諏訪因幡真田伊豆等 被仰付伊奈ノ材木を出可申

由被仰遣為御使五味金右衛門を被仰付十二月十二日禁中仙洞御普請初る次第南方ノ

しほ築地ノ請取ハ伊達政宗本多美濃守最上出羽守榊原遠江守里見安房守奥平大膳大夫

松平摂津守南部信濃守佐竹右京大夫米沢景勝井伊兵部少羽柴右近同越中守

西方築地ハ 羽柴三左衛門越前少將殿生駒讚岐守寺沢志摩守松平筑前守

北ノ方ハ但是ハ後^二出来ス大坂秀頼公と右衛門督殿御丁場也院之御所之御築地東の方越前少將

殿黒田筑前守鍋嶋信濃守松平長門守堀尾山城守松平土佐守加藤左馬助京極若狭守羽柴

丹後守藤堂和泉守蜂須賀安房守富田信濃守有馬玄蕃頭鳥居左京亮田中筑後等也

十二月十五日 大御所様自関東還御就出羽守遠行為上意駿河守殿至其地下向

之儀レ然は無相違各可有尊敬事 尤猶如前之跡式可被申付趣對駿河守被成下

御内書条弥可被得其意者也 大炊頭 雅楽頭 佐渡守

最上 家老中

（朱書）十九年也

（朱書）

（朱書）

（朱書）

（朱書）

（朱書）

（朱書）

（朱書）

慶長十八癸丑年

一 正月朔日大風吹秀頼之使者為御札駿府へ大野主馬来る但駿河へ速水甲斐守大野ハ江戸へ趣

一 二日大風吹江戸御謠初着座
左 越後少將殿 西郷出羽守
右 松平丹波守

一 最上駿河守 小笠原兵部少輔
右 松平外記 牧野駿河守

一 五日駿河二面 大御所山鷹野二面御出勢子二面不殘
可出由被仰付皆々罷出

一 七日田中へ御鷹野二面御出
八日於江戸山口但馬守改易二面被仰付是ハ故石川日向守娘を但馬守子息へ嫁此娘之父石川存生之時被押籠罷在候其仁之娘を御免許無之中縁邊曲事之由被 仰付

一 同九日為御見廻伊達政宗駿府へ参上す
一 同十日大久保相模守以目安を申上レ右之山口御勘氣之申わけ仕是ハ彼石川長門守孫女ハ相州にも外孫也是により右之祝言之段初少々申上候由色々但馬申わけいたし候へ共將軍家少も御取上なし

一 十四日駿府二面金座後藤庄三郎方へ古田織部使者として使あり其書中二面借金數多借申度由有之則委細相改之得は盗人にて謀書也則奉行所へ注進申候間町奉行彦坂九兵衛同心を遣し擲取候へは相宿二面居申候者助来切合申候二面付九兵衛同心七人手負當分三人死盜人并助申候者手負候て召捕候へ共相果申候右之様子達 上聞候て右之宿ハ柴田左近組之御歩行之衆之所也彼宿御成敗柴田左近御改易

一 北國肥前守煩以外二面御座候二面付遺物上肩付此代五百枚金五百枚御両人之若君へ金五十枚宛札アリ

將軍家へ新身藤四郎之脇指一文字之刀両若君へ金五十枚宛上

一 十五日江戸二面大久保相州今日之御札二面不罷出是ハ右山口儀二面付御目安候へ共御取上不被下候事御恨二面奉存暫煩と称して籠居す子息兩人ハ翌日より出仕加賀守被相果候後嘆きのあまり短氣二面罷成物毎に幽懷之様二面罷成候本多佐渡守父子と日頃中不能候間彼寄合之時何事か可致出来と一族共無心元存候

一 廿五日申ノ刻池田三左衛門於國死去五十才昨日辰ノ刻より中風仕吐血死是二面付自江戸土井大炊頭為御使駿府へ参る

一 播州へハ山岡五郎作為御使被遣
一 廿六日江戸二面御うは死去是ハ將軍家御幼少ノ時分より御介抱被申仁也河村善次郎母也殊之外才人二面諸人惜之

一 二月朔日去年冬高麗王より進上申大鷹十一羽九州へ参着
一 有馬修理於甲州郡内切腹被 仰付

一 二月二日大坂二面火事あり三ノ丸之長屋少焼
一 二月廿日青山播磨死 將軍家御若年之時より奉附仁也御家老二面出頭申近年ハ御前遠罷成候三月朔日小出播磨守大坂二面死

一 四月二日上総介殿駿府へ御越
一 坂崎對馬守以目安を申上富田信濃守不儀之子細ハ去ル子ノ年一乱以後色々不行儀御座候由申上將軍家青山圖書を以駿河へ被得御意則信濃守を与州より被召上申わけ可仕由被仰付

一 四月廿五日大久保石見守死去六十九下癩之煩色々令養生候得共無本復相果申候遺言に死骸を金棺二面入駿州より甲州へ送り一國之僧を集め葬礼結構二面可仕由申置候へ共左様成儀仕間敷由從 大御所様被仰付

一 五月十七日松平筑前守駿府へ下出仕被申同江戶へも下向

一 六月六日池田三左衛門跡目被仰付安藤對馬守為御使駿府へ参直二面令言上翌日本多上野介を江戸へ被遣

一 武藏守二面播磨國を被仰付但此内三郡十三万石備前へ付を御成敗被仰付之由主殿ハ病死仕右京

一 左衛門督二面備前國を被仰付宮内少輔二面淡路國を被仰付池田左近同内記若原右京池田出羽伊木長門武藏守二面付

一 荒尾志摩守同但馬守和田和泉ハ左衛門督二面付
一 佐々尾四郎左衛門加賀九郎左衛門宮内少輔二面付
一 七月九日大久保石見子供藤十郎外記權之助雲十郎内膳又越後と播磨二面男子有以上七人

一 女子ハ御坊と名付江戸二面有いづれも被召籠岸和田小出大和守跡目被仰付右京を大和守被成保科彈正二面被 仰付

一 甲州為仕置嶋田清左衛門被遣大久保石見事ハ甲州武田之内大藏大夫と申猿樂之子也無双之才覺者故信玄取立兄ハ土屋同名にして土屋新之丞と申候て長篠二面討死弟ハ藤十郎石見是也甲州御入國之時日下部兵右衛門二面取入御目見得仕御所造作之指圖并細川殿御物

一 數寄之風呂之指圖二面兵右衛門所へ桑木風呂作申候を御覽被成可被召仕由二面大久保相州二面御預後二面相州同名二面被仰付御代官を仕大久保十兵衛と申勘定方才覺有之石見伊豆佐渡等之金山奉行被 仰付國奉行二面評定衆之なみに加判仕無双のおこり者名譽之儀也代官所へ参候時ハ家来之外美女廿人猿樂廿人供二面召連上下泊々二面打はやしおとらせ通り申候死後に佐渡之御勘定仕候へと子共并手代田辺藤五郎以下被 仰付然る二面佐渡之儀ハ石見守拝領之由存自分二面知行仕罷在候間中々御感狀難成と申拝領ならハ御書出可有知行ハ千石於關東

被下候外ハ無之と御意被成急ニ御勘定可仕由
被仰付候へ共不罷成候ニ付惣領藤十郎懸川
へ御預其弟外記横須賀へ御預其弟青山権之助

ハ小田原へ御預其外男子四人以上子共七人七月
に御預八月九日其御預之於所皆々御成敗手代共
召集彦坂九兵衛被仰付籠へ入御穿鑿候得は

石見押領之金銀數多相改不殘指上申候手代
共之内正路申上候分十人計御免殘ハ御成敗石
見家内闕所仕候処何之ために仕候哉倉之中

毒之酒數石作置又武田ひしのまくのほり
數多用意武田之系圖を写候て己か氏を武田
よりつり置申候此事御せんさく被成候処に

甲州府中長遠寺と申一向坊主所持申候
武田巻物を金銀を送り所望し如此右之長
遠寺ハ信玄之ニ男聖堂と申亡目あり其子

長遠寺之弟子になり寺を請取れハ武田の
まくも所持有ける也此僧ハ石見守渡シ候罪科
伊豆の大嶋へ流さるる

武藏相模兩國廻被仰付久永源兵衛五味金右衛門
加藤市六伊丹喜之助石見代官所此時所々の大木迄相改燒
印ヲ打

信州松本城主石川玄蕃近年大久保石見守と
懇切にて知行隠田數多有之ニ付豊後之佐伯へ
配流毛利伊勢守御預松本之城ハ小笠原拜領

六月廿一日御家人松本清六と申者鈴木平兵衛
子を令同道品川へ遊山出増上寺へ寄寺のくり
へ行出家衆是をとかめ喧嘩成門をたて出合

大勢切合申候間清六方小勢にて二人ともに
相果申候
七月廿一日松平忠左衛門に大番頭被仰付
有馬左衛門佐四万石拜領父罪科伏跡被下例

なしといへとも若年御奉公申上其上父子
不和にて候間各別の由如此添次第也
八月廿五日浅野紀伊守卅八歳死去痲瘡以之

外相煩為養生紀州へ下り終相果申候葛城

と云かふき大夫無右衛門と云かふき大夫かひ置こ
れにふけり虚して煩重り如此
九月十七日大御所様駿府御立同廿七日江戸へ御
着

九月十九日江戸西ノ丸天台論義御聴聞
九月廿七日沼津の城主大久保治右衛門死去法名
道喜近年大病今迄不思議存命今日大御所御鷹
野出御越谷

廿九日大御所様選御西丸
十月朔日諸大名大御所へ御礼有之此日大御所
里見讃岐守御改易安房守力伯父也十三日弓氣多
源七久貝忠左衛門御勘當は先年中村一角

死去之時為上使被遣遺領諸道具如何可仕旨
江戸へ言上幸大久保石見石州之金山へ下向
之時分候間石見可相渡旨公方様被仰付候由

老中ノ状來問大久保石見渡す此事曲事
成如此鶴殿兵庫助同十三日就此儀改易其身
土井大炊頭被預置種々門ありけれ共白状せず

繩身をからけ上よりおろしあけ攻けれ共
不申
同月廿七日兵庫日頃懇志仕候小野寺と申者申
送りけるハ侍たる者問通命いきて無專と申

送る間尤と存兵庫自害して相果候
谷金阿弥子息六右衛門も改易中村一角家老共
牢藤半右衛門川毛備後中村伊豆守三人近年

駿府相詰罷在候是も改易被召預佐々淡路
兄弟駿府罷在候是等大御所様御改易此
淡路ハ信長公秀吉公之御時より鷹匠之名人也

同八日富田信濃守と坂崎と公事對決あり
富田負成御改易是ハ坂崎者人を付信濃所へ
にけ入申候信濃依為縁者抱置色々託事い

いたす間坂崎不及是非しからハ扶持を放し
候て追拂候へと相濟候処信濃彼者他所に隠
し置金銀を遣し令扶持所令露顯候間信州

ハ伊豫十萬石被召上牢筆其身奥州岩城

配流
九州之高橋右近改易立花左近預る此左近ハ
子ノ年御改易其後在江戸五年以前奥州赤館
二萬石拜領高橋富田七一味故也

同月十六日川毛備後被召預内藤若狹守同廿五日
石川肥後同弟半三郎改易

同廿日大御所様戸田へ御鷹野廿三日河越へ御座
岩付浦和大宮御鷹野同晦日忍へ御座十一月
廿九日江戸へ御帰藤堂和泉守伊勢被召寄河

越へ参上仕大御所御對面被也富田信濃跡當納
先以可致代官之由被仰付

十一月九日佐野修理御目見得兄富田雖御勘氣
無疑旨申達如此
堺之奉行米津清右衛門撰州芥川之百姓と

云分いたし百姓を成敗公事成清左衛門負
阿波国へ配流同廿日佐々孫助同内記被召預是皆富田一味故也
十二月三日大御所様駿府へ御帰可被成由にて御

出小杵御鷹野同六日相州中原御出十二日小田原
迄御出可被成とて荷物何もつけ出し申候此
所之原御目安を上る者あり馬場八左衛門と

申者也八十計見ゆる老翁也是ハ甲州穴山左衛門
大夫信君家老四人之中也穴山ノ後おまん様へ
付致御家老ヲ余之家老と公事仕負候て小田原

へ御預成罷在其身相州へ何とそ恨も有之
事か又は相州と申愚敷衆たのまれ書付候哉
小田原にてあやしき事不思議成事共有之

由書付上申候由此内何とそ思召當之儀も御座
候哉俄江戸御越年可被成由荷物つけ
返す其上江戸へ被仰遣事あり同十二日之

晚江戸ノ土井大炊頭為御使中原へ参一人御前
参直何やら申上余人不聞之
十三日大御所様小杵之御茶屋迄御帰被成為

御迎將軍家此所へ出御御隱密之御相談有之
十四日兩御所様江戸へ還御

一 成瀬隼人駿府へ被遣為若君御座候^二付^而
何とそ用有事かと諸人申候又為御見廻板倉

内膳を被遣伊勢衆三河衆毎年於駿府越
年仕正月四日五日之頃江戸へ下り申候来春ハ

無用^二可仕由内膳^三被^レ仰付

一 同拾九日^{刻卯}主上新内裏へ御徒移石垣築地無比
類出来前代未聞也去慶長十六年御即位之

後一院主上御父子之御中和^二人之無出入^一
近衛殿
龍山ノ女

后一院を家康公へ讒言御申候間不可然由被仰
一院被為聞召猶以御立腹是は御即位之時御讓

可有書物以下依不讓給也院之御領二千石御

不自由甚シ内裏之御領一万石宮五人一人は

近衛殿御養子^{是ヲ信尋親}姫宮も有之院之御年

四十三主上御年廿一<sup>今上ノ御弟八高
松宮好仁親王也</sup>

一 同廿四日 大御所様越谷へ御鷹野^二御出それより
河越へ御越

一 廿六日將軍家より大久保相模守^二被仰付上方
畿内西國吉利支丹之宗門御法度^二被成候間

相州罷上委細相改穿鑿可仕由被^レ仰付

一 同廿八日 大御所様御鷹野場より江戸^江御帰
今日節分にて候間西丸新城へ御座被成御越

年可被成候由之儀にて如此

一 廿九日織田有楽歳暮御礼新庄^{城守}出仕此外羽柴

越中守鍋嶋信濃守松平土佐守堀尾山城守

松平下総守石川主殿頭本多美濃守松平伊豆守本多

豊後守松平主殿頭各献進物出仕故大久保

石見守遺物堅被改付テ金銀從諸國上る

凡五千貫目余也其外金銀^二而^一拵たる道具不知

其数何も駿府へ上納ノ金ノ道具茶碗天目同

臺^龍■折敷印藏香合茶谷風炉水桶燭臺

手水盥^盥 同柄指手巾懸 香盆 鏡臺 櫛

箱 同櫛^櫛 油桶 燭真取 手箱 三線 前代未

聞也石見守慶長六丑ノ年^二今迄十三年

佐渡石見諸方金山へ一年^二一度宛上下路

次中召仕上るう女七八十人其次^二合二百五十人

召連泊々ノ宿ヲ我代官所^二申請家々大屋敷
作双へ傳馬人足も不知教ヲ偏^二天人の樂も

かゆうかと申候毎日女かぶき女能又ハおとりを
見物すと也日本一のおこりものなれとも無双

出頭人にて誰も其様子不申上候故也